

企画委員長の独りごと

藤 田 宏 (数学教室)

本年の3月末に千葉大学へ急に移られた飯山教授の後任として理学部企画委員会(以下、単に企画委員会)の委員長をお引受けしてから数ヶ月が経った。その時点まで企画委員会の平のメンバーですらなかったことによる認識不足や、たまたま抱え込んだ“理学院構想”の重圧にとまどいながらの数ヶ月であったが、いまさら、企画委員長の抱負を語るには時が経ちすぎた。といて、今期の企画委員会の活動を回顧する時期に至っていない。そこで、企画委員長として一文を草して理学部の皆様に御挨拶するチャンスとして与えられた当記事の執筆であるが、就任以来の思いをとりとめないままに記させていただく。

企画委員会は学部長の諮問機関である(以下、理學部長、理学教授会などを単に学部長、教授会のように記す)。この場合の学部長の存在は、学部の自治のまとめ役である。すなわち、自治の原則にもとづいて学部の意志決定を支える教授会の主将が学部長であり、その手伝いをするのが企画委員会の任務であると私は考えている。具体的な作業は、学部長が教授会に諮る原案作りが主になる。この点では、教授会内に設けられた他の委員会、すなわち、会計委員会、人事委員会と同様である。ただし、企画委員だけは選挙によらず、学部長指名によって選ばれる慣行ができてしまっている。

さて、理学部は自然科学の研究教育を使命とする人達の集団としては同志的な統一を保っているが、活動の形態(研究対象、研究方法、教室のサイズと家風)では極めて多様である。また、教授会での直接民主主義が素朴な形では機能していく位の巨きさに達した学部である。この多様性と巨きさにも抱わらず、学部の意志決定が自治の名に

ふさわしい理解と民主的納得に基いて行われるためには、格別の努力が必要である。

以前から、わが理学部は学部長に人材を得ている。胆力・知略に秀でた有馬前学部長、明敏誠実な人格によって信望の厚い朽津現学部長はその好例である。しかし、どのように英明な学部長でも教授会との一体性を保つためには自他の努力と協力が必要である。評議員になってから眼のあたりにすることであるが、最近の学部長の職は大仕事である。責任の重さや職務の繁忙さもさることながら、学理・条理だけでは通じない世の中との対応、とくに、行政との折衝は誠に苦惱多きものと同情にたえない。大学事務局等を通じて即答を求められることの多い予算関係の折衝では、学部長が教授会の意向を糺す時間ももちろん、企画委員会で相談する機会すらないままに事を決まなくてはならない場合が再々起る。行政が東京大学の権威に畏敬していた佳き時代とは状況は全く違う。確かに、当今の学部長には荒海で船を操る船長のように“相談しているいとまがない”辛さがある。また、大学内の他部局、大学外の諸機関と微妙な交渉を行わねばならない問題が続出する最近の情勢では、当部局ではあり得ないが、「敵を斯くには味方よりす」は論外としても、「計りごとは密なるを以て貴しとす」といった兵法に従いたくなくなる部局長もおられるかもしれない。

しかし、状況がいくら厳しくても、我が理学部は軍隊でも会社でもない。自治の精神に則って自ら選んだ主将を支持する正直な学者の運命共同体である。学内外に対して理学部の主張が説得力を持つとすれば、その根拠は理学部の学問における実績および自治の名にふさわしい全学部的な合意にある。企画委員会の基本的役割りは教授会と学

部長との間に立って教授会の意向を掌握し、上記の民主的合意の形成の手伝いをするのである。もちろん、理学部は教授会メンバーだけで成り立っているわけではない。企画委員会で審議される案件の多くが職員・院生・学生に深く関わっていることも充分承知している。上に基本的役割りと述べたのは、教授会内に設置された企画委員会の責任の負い方を確認した趣旨のものである。

4月以来、関係者の協力をお願いして、概算要求の手順としては遅ればせの形になりながらも、中間子のセンターや天文台の施設について企画委員会でヒヤリングを行って勉強し、その結果を教授会に伝えることにより、これ等の要求（熱烈）支持を確固とする努力を行ったのも、企画委員会の役割りに対する上述の認識に基くものである。ちなみに昔は研究施設の新設に向けては、もっと念入りな議論が行われた。たとえば、情報科学科のはしりとなった情報科学研究施設の設置のときには、むしろ行政がそれを容認する雰囲気が出ていた当時の現状のもとでも、会計委員会（当時は施設新設の可否や順位も審議した）や総合計画委員会（企画委員会はこれにとって代ったものである）で厳しい検討が行われたし、教授会の議論は部門の内容にわたってホットであった。故高橋秀俊先生が学部内で懸命に説得に努められたことを思い出す。現在にくらべ、まだその当時は「理学部で決めれば実現する」という自信があり、それが真剣な議論につながっていた面もあるが。

研究施設の問題よりも格段に大きなスケールの問題として企画委員会が取り組んでいるのが、「理学院構想」である。具体的な案を作成する作業は、企画委員会に付属する小委員会「理学部大学院構想検討小委員会」（委員長田隅教授）が担当していることは理学部内では周知であろう。実の所、理学部（大学院の対応部分を含む）の身の振り方を決める大計画としての「理学院構想」は、今後の検討によって固めるべき流動的な部分が少くない。意図する方向は確然としているものの、いわば、構想から計画へ昇華しつつある段階である。

教授会でも度々確認されたことであるが、日本の自然科学の研究教育に対する使命感にもとづいて、「理学院構想」の実現の努力をするべきものと私個人も信じている。同じ目標が現制度内の運営の改善によって実現されるとの所論は、当事者の切実感からは遠いものであり、数十年に亘る現制度中での努力の敗北の歴史が与える反証に眼をつむるものであろう。

もとに戻って、「理学院構想」の内容は、まだ、固定化されていないのであり、内容についての前向きな忠告は我々の最も歓迎するところである。事板は、とてつもなく広く深刻である。それだけに、実現に向けてのストラテジーに小賢しい策略は無用であると考えている。忠告に耳を傾ける謙虚さと信義を重んずる誠実さによって説き続けられれば、学内外の理解が得られるものと信じたい。

さて、現状では「理学院構想」の実現は東大全体での「大学院重点大学構想」と無関係ではあり得ない。これらの理学院構想を取りまく環境の評価に関して、私は（数学的に？）単純明快な判定規準を持っている。「理学院構想の実現に役立つものは良く、それを妨げるものは悪い」である。これによると、理学院構想の実現に盡力してくれる大学執行部は良い大学執行部であり、理学構想の要求を認める行政官は良い行政官である。逆に、たとえば、「入学試験のやり方で言うことを聞かない東大の大学院構想などつぶしてしまえ」という地回り風の発想をする代議士（その存在がうわさされているが、もし存在すれば）は、悪い代議士である。

注 学内には別の単純明快な判定規準を持つ人達がいる。「臨教審路線に符号するものは悪い」という判定規準に従って理学院構想にも反対だとする人達である。当理学部の物理学科を私と同期に卒業した不破哲三氏が健在（病中でない）ならば、こちらの判定基準を時間的に先発した理学院構想に適用する妥当性を尋ねてみたいものである。